戸塚の老舗 とつかにある老舗をご紹介します

生駒植木株式会社 小雀町 1805

創業 大正8年（1919年）

自社圃場（ほじょう）での植木の生産販売や、造園工事業を主に営んでいます。創業者である曽祖父が、農業の傍ら自宅前の畑でツツジの生産を始め、緑化業に携わることになりました。当時は、鎌倉や逗子、葉山など、大きな庭を有する別荘で庭木の需要が多かったことと、鎌倉方面の土壌が植木生産に適していなかったことなどから、この地が植木生産地として発展していったそうです。その後、自社で生産した植物材料を使った造園工事業を行うようになっていきました。植木は種や苗を植えてから出荷するまでの生産スパンが長く、早くて3年、長いものでは100年以上かかります。この生産スパンの特殊性が事業を長く続けてこられた一因でもあると思います。先代が育ててきた植木という財産を受け継ぎ、次の世代へ繋いでいかなければという使命感で事業を継続しています。植木も時代とともに、求められる種類が変化します。また、日本ではあまり需要がない種類でも海外では重宝されたりもします。

最近は、環境に配慮し、できる限り廃材を出さないように、剪定（せんてい）枝や草などをチップ化し、肥料として再利用できる施設も整備しました。事業内容は時代に沿って少しずつ変化していますが、これからも横浜の緑を守りながら未来につなげていこうと思っています。

現在、横浜市の指定管理者として、小菅ケ谷北公園（栄区）の管理をしています。公園では里山を再生したり、米づくり、お茶摘み体験などいろいろ創意工夫して、皆さんに自然の大切さを知ってもらうための仕掛けづくりをしています。たけのこ掘りのイベントは、いつもあっという間に定員いっぱいになります。また、小学生を対象とした「緑育」や中学生の「職業体験」にも取り組んでいます。緑や樹木がどんなに大切なものであるかを知ってもらい、これからの「戸塚の緑」を守ってほしいと思います。

4代目 代表取締役 生駒 順さん

本業及びその他の活動を通じ、環境保全や地域ボランティア活動などの社会的事業に取り組んでいる企業として認められ、横浜市から「横浜型地域貢献企業」に認定されました。

生駒造園土木株式会社 小雀町 1956-1

創業 昭和39年（1964年）

創業 大正8年（1919年）の生駒植木から造園請負業として分かれて昭和39年（1964年）に創立

祖父の代に「生駒植木」から造園請負業として分かれて始めました。創業以来、本業一筋でやってきました。大きな木を移植するときなど、今でも人力に頼ることがあります。東俣野町にある「俣野別邸庭園」で大きな木を動かしたときは、機械が使えなかったので、昔ながらの技法で人力に頼りました。木を立てたまま移動させる「たて曳き」は、昔からの技術が必要です。そのほか戸塚区内で印象に残っているのは、まさかりが淵（汲沢町）を整備したことです。滝に石を積み上げるために、川（宇田川）の流れを変え、水を止めて工事をしました。この石積みなども、今ではできる職人が少なくなっています。このような昔からの技術は、自分たちの財産でもあると思っています。「造園」は何もない真っ白なキャンパスの上に絵を描いていくように、自分の裁量で景色が変わっていくので大変やり甲斐のある仕事だと思っています。

これからは時代の移り変わりに取り残されないように、新しい技術も掘り起こしていかなければなりませんが、地域密着型の企業として、昔からの伝統や地域との繋がりを大切にしていきたいと思っています。

4代目 代表取締役 生駒 隆一さん（左）
常務取締役 生駒 武則さん（右）

昭和25年（1950年）頃までは大きな滑車を使って人力で木を運んでいました

「いい人材に恵まれればいい仕事ができる」と女性にとっても働きやすい環境を整え、「よこはまグッドバランス賞」（※）にも認定されています。

※よこはまグッドバランス賞
男女ともに働きやすい職場環境づくりを積極的に進める市内中小事業所に対して横浜市が認定しています。

本業及びその他の活動を通じ、環境保全や地域ボランティア活動などの社会的事業に取り組んでいる企業として認められ、横浜市から「横浜型地域貢献企業」に認定されました。

井野写真　戸塚町 16-10 ブルーゲートビル101

創業 大正3年（1914年）

大正3年（1914年）、初代にあたる曽祖父が写真館の営業を始めました。
今年で創業105年を迎え、私は5代目になります。
祖父が、写真を現像するための現像液を天秤で計って調合していた姿を覚えています。
父は、川崎の写真館で修業し、写真のセンスを磨いていたようです。
今ではデジタル写真が一般的になりましたが、フィルムの代わりにガラス板を使っていた時代の写真は、引き伸ばしたりすることもなかったので、等身大の姿を映し出した味のある写真でしたね。その後、フィルムに変わってからも、フィルムは高価で一度にたくさんの写真を撮ることができなかったので、ファインダーを覗いた時は、とても集中してピント合わせなどしていました。たくさん撮った中から選ぶ現在の感覚とは180度違いますね。
自宅の2階が広いスタジオになっていて、撮影に使った大量のガラス板がスタジオの端に干してあったのですが、子どもの頃にそこのスタジオで遊び回っていて、干してあったガラス板を割ってしまった、という苦い思い出もあります。
写真館として、およそ一世紀にわたり、戸塚の地で営業を行ってきました。お客様の中には、昔から代々、記念日など節目のときに記念写真を撮り続けている方も多く、時には昔ここで撮った写真を見せてくださったりします。
写真の技術はすっかり変わりましたが、これからもこのようなお客様を大切にしながら、戸塚の地で写真館を続けていきたいと思っています。

5代目 井野 辰也さん

昭和30年（1950年）代

兄弟そろって…

出典：「戸塚はこんな街でした」田谷そよ

紀久薬局　戸塚町 6001-5

創業 江戸時代中後期（詳細不明）

江戸時代に、創業者の紀伊国屋久兵衛が、薬や油などで商いを興し、5代目の頃から薬屋をはじめました。明治時代に薬局制度ができ、7代目が戸塚で初めての薬剤師となり「紀久商店」から「紀久薬局」に名前を変えました。
「紀久」は「紀伊国屋」の紀と、初代「久兵衛」の久の字が由来です。
戸塚駅周辺は、駅前再開発やアンダーパスの区画整理事業で姿を変え、昔から営業を続けている店舗が少なくなってしまいました。
薬局も時代とともに営業形態も変わってきましたが、処方箋（しょほうせん）調剤だけでなく医薬品、漢方薬、健康相談など幅広く対応し、地域のお客様に支えられております。
「戸塚の健康とともに」「戸塚の街の薬屋さん」をモットーに、今後も代々引き継いできた「紀久」の名前を後世まで残していきたいと思っております。

代表取締役 加藤 眞人さん
戸塚町一丁目町内会、戸塚区薬剤師会、
学校薬剤師など地域のために活躍されています

[思い出のシーン…]
再開発前の店舗周辺は、車のすれ違いもできないような狭い道路でした。
明治時代の店舗の柱は、関東大震災にも耐えました。

再開発前の旧矢沢通り（右手が紀久薬局）

「紀伊国屋」時代の店舗（明治時代）

株式会社 茶碗屋　戸塚町 16-1 トツカーナモール2階

創業 明治2年（1869年）

呉服店として創業してから150年です。その前は、戸塚宿の旅籠（はたご）でした。
「茶碗屋」という屋号についてよく質問されます。伝えによると、もともと尾張出身の陶工であった先祖が、焼き物の技をさらに高めようと水戸に出てきたものの、途中、志を断念し、ここ戸塚宿に辿り着いて始めた旅籠の屋号を「茶碗屋」と命名したとのことです。
その後、江戸末期になり、旅籠の役目も終わりに近づいたころに、まず初めに古着を商うようになり、明治2年（1869年）、曽祖父の代で呉服店を始めたそうです。

4代目 代表取締役 加藤 亘章さん

［思い出のシーン…］
街にあった映画館で、5歳の時にディズニー映画を見ました。そのほか「ゴジラ」や「若大将シリーズ」は好きな映画でした。現在のサクラスの場所にあった「元屋（もとや）」という商業施設に区内で初めてエスカレーターが設置されたときは、珍しくてよくエスカレーターに乗りに行っていました。再開発前の商店街は活気があふれ、人とのつながりも強く、お祭りのおみこし担ぎも声を掛け合って地域みんなで街を盛り上げていました。開発に伴う立ち退きでだんだんと人手が減少し、みこし担ぎも少なくなってしまったことがちょっと残念ですが、これからも古い伝統を大切にしながら街を盛り上げていきたいですね。

出典：「戸塚はこんな街でした」田谷そよ

夏物大売出しの景品が「たんす1組」
明治41年（1908年）

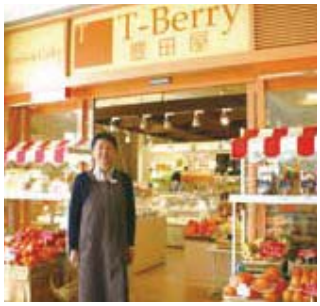
明治時代のお店の様子

有限会社 豊田屋　戸塚町 16-1 トツカーナモール3階

創業 昭和2年（1927年）

昭和2年（1927年）に祖父が乾物屋として創業しました。
もともとは、鎌倉郡豊田村（現在の栄区田谷の辺り）の農家でした。
豊田村からこのあたりに出てきたので「豊田屋」です。父の代から乾物のほかに果物を扱うようになりました。最近までは昔からのお客様のために乾物も置いていました。
その後、駅前再開発など時代の流れの中で、これから果物だけで商売を続ける難しさを感じて、自社で作ったケーキも販売するようになりました。
果物を得意とするケーキの職人さんに作ってもらっています。
高齢の方は意外と果物が好きですが、若年層はやはりケーキ。ケーキを販売するようになってから若いお客様が増えました。ツイッターなどのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の口コミなどで広がっていっています。
また、お店での販売だけでなく、接待やお葬式用などの果物専門店ならではの需要も増えています。

戸塚駅西口再開発前にこのあたりにあった600軒ほどの商店も、後継者がいなかったり、他へ移転してしまったりで、今も続けている商店は20軒ほどになってしまいました。それでも父がお店に出ているときなどは、昔から知っている地域の方々が来て声をかけてくださいます。
自分も地域の皆さんの顔や名前をよく知っているので、これからも気軽に声をかけやすい地域密着型のお店として、新しいものを取り入れながらも今までの繋がりも大切にして、続けていきたいと思います。



3代目 石井 正樹さん

昭和39年（1964年）頃

おいしいもの
とつかブランド

豊田屋の「マスクメロンポート」は「おいしいもの とつかブランド」に認定されています

株式会社 長野工務店　小雀町 1137

創業 大正3年（1914年）

創業者である曽祖父がこの地で生まれて以来、ここを離れることなく、地域を中心とした道路や河川、下水道の整備をしてきました。このあたりは、水田と畑が広がる農業地域で、近くを通る国道1号線も舗装ではなく砂利が敷かれている状態でした。大雨が降ると砂利が崩れてしまい、その都度修復しなければならなかったようです。
曽祖父は大正村の村会議員を務めていたため、砂利の納入を役所から依頼されたり、近辺の水田への水引工事などの手配も行い、それをきっかけに道路建設業を生業とする「長野組」を立ち上げました。当時は自宅付近にトロッコの線路があり、早朝からトロッコで砂利を運んでいたそうです。その後、道路だけでなく、河川、橋梁（きょうりょう）工事にも携わるようになりました。

［思い出のシーン…］
以前は兼業農家でした。自分も子どもの頃、稲刈りや脱穀などの手伝いをしたことや、正月にはお餅をついて、地域の皆さんに配ったことを覚えています。
今でも昔からの知り合いでもある地域の方々の相談に乗ったり、昔の話をしたりしています。今までこの地でやってこられたのは、地域の皆さんのおかげだと思っています。これからも地元のために尽力していきます。

本業及びその他の活動を通じ、環境保全や地域ボランティア活動などの社会的事業に取り組んでいる企業として認められ、横浜市から「横浜型地域貢献企業」に認定されました。

5代目 代表取締役 長野 真行さん

古い測量機

昭和2年（1927年） 高嶋橋の架け替え工事
横浜新道の建設（昭和30年代）なども…

経師・表装 なかむら　戸塚町 16-19

創業 明治時代

明治時代に曽祖父が中区羽衣町で始めて、祖父の代に戸塚区旭町に移転してきました。
昔は車が普及していなかったので、大きな襖（ふすま）や障子を運ぶのに苦労していたようです。祖父は大船まで襖4枚くらいなら担いで届けていたようですが、風を受けると、まるで大きな凧を担いでいるようだと言っていました。父の代になってやっと自転車にリヤカーをつけて使うようになりました。
昔、このあたりは割烹（かっぽう）旅館が多く、店の隣も「魚富」という旅館でした。戸塚で相撲の巡業が行われたりしていて、そんなときは、若い力士が旅館に出入りしていました。

［思い出のシーン…］
子どもの頃の思い出といえば、戸塚に映画館があって、よく映画好きの祖母に連れられて映画を見に行っていました。今と違って入替制ではないので、立ち見で、お菓子を食べながら手すりにもたれながら見ていました。2階には畳敷きの観客席もあったんですよ。
そして、やはり柏尾川。夏は川に堰（せき）を作って、子どもたちが泳いだり、ウナギ、ドジョウも獲れたし、イナゴやバケツ一杯獲れたザリガニを食べたりもしていました。朝の柏尾川には、川の中が真っ赤に見えるほどザリガニがいたんです。
戸塚は人口も増えて、大きな街になりました。
昔から続けている夏のお祭りも、昔を知っている地域の人が少なくなり、やりづらくなってきましたが、これからも続けていきたいと思います。
昔の生活は楽ではなかったかもしれませんが、子どもにとっても大人にとっても生き生きとした、豊かな時代だったと思います。

4代目 中村 直さん
交通指導員として地域で活躍中

昭和11年（1936年）頃

中屋菓子舗　戸塚町 6003-2 エトワール・リシェ1

創業 嘉永2年（1849年）

7代目 星野 すなおさん

この店を継いだ時に、蔵にあった古いものはほとんど譲ってしまい、昔のことを知っている両親がもう他界してしまっているので詳しいことはわかりませんが、明治時代の免許鑑札（かんさつ）の木札は今も大切にしています。

戸塚駅再開発の前は踏切のそばにお店があり、一日中踏切の音が聞こえていました。貨物列車が通るたびに家が揺れていたことも思い出します。
昔からの馴染みのお客様には再開発前の方が立ち寄りやすかったと言われますが、それでもわざわざ買いにきてくださり、ありがたく思っています。

藤沢に製餡所があって、代々伝わる秘伝の餡子を作っています。
昔に比べると少し甘さ控えめにしていますが、ご高齢の方々にも好評です。

また、昔ながらのお菓子をアレンジして作ったイチゴを使った和菓子は若年層に人気です。
そのほか、蒸かしすぎてしまった和菓子を敢えて「訳あり」と表示して店頭に出してみたところ、味は変わらないので中々の人気になりました。
これからも代々伝わる味を守りながら、次の代の息子とともに、新しい和菓子にチャレンジしていきます。

免許鑑札（明治時代）

林屋三枝木商店　平戸町 6001-5

創業 明治45年（1912年）

三枝木 鉄朗さん　三枝木 林治さん

「林屋」として明治45年（1912年）に創業、昭和42年（1967年）に「はやしや酒店」を「株式会社林屋三枝木商店」へと変えました。屋号は初代の「林之助」の一字をとって「はやしや」と名付けました。一時期はコンビニエンスストアを運営するなど、時代に合わせて業務形態を変えてきました。今は店舗を持たず、飲食店への配達のみを行っています。時代に合わせて形を変えることで今まで続けてくることができました。
昔は樽からお酒を量り売りしていました。配達は今のような一升瓶ではなく、「はやしや」の名前が入った白鳥徳利（とっくり）（首の長い大きめの徳利）が使われ、リヤカーに積んで届けていました。近所の古い家からは、今もこの名前入りの徳利が出て来ることがあるといいます。
樽酒は保存状態によって味も微妙に変わり、時間がたつと樽が酒を吸ってしまいます。水で調整しながら店独自の味をうまく引き出すのが酒屋の腕の見せ所でもありました。

昭和30年（1950年）頃の店舗

［地域のために…］
地域では平戸地区連合町内会会長、戸塚区保護司会理事、民生委員・児童委員など数々の地域活動に参加し、長年の消防団での活動に対し、平成7年には、国から勲六等単光旭日章（現在の旭日単光章）を受章しました。
こうした活動は町や地域への恩返しだと思っています。

勲六等単光旭日章受章祝賀会

松本屋　戸塚町 16-1 トツカーナモール1階

創業 慶長9年（1604年）

元々は、元町の東峰八幡宮の山を越えて下った辺りに住んでいましたが、慶長9年（1604年）、東海道戸塚宿が設けられた際に、幕府の命により相澤傳衛門が戸塚宿の問屋役となり、戸塚駅近くに「旅籠（はたご） 松本」を創業したのが始まりです。旅籠を営んでいたころは、道中病気などで、不幸にも命を無くした旅人もいたそうで、相澤家の墓地には今でもいくつかの無縁仏の石碑が立っています。その後、醤油製造業や酒類販売業も営んでいましたが、関東大震災で家屋が全壊してしまい、その後は酒類販売に専念するようになりました。「松本」の屋号は、移転する前の家の前に大きな松の木がたくさんあり、「その松の木のもとから来た」から「松本屋」になったとか。

22代目店主 相澤 富男さん
区の交通安全協会の支部長を務めたこともあり、今でもまだまだ区の交通安全のために尽力されています

大正時代

［思い出のシーン…］

店の前が箱根駅伝の中継所になっていました。（昭和30年（1955年）からコースが変わりましたが）不動坂交差点を左に曲がり、国道1号線を走ってくると「戸塚大踏切」を渡らなければなりません。当時の踏切は鉄道（国鉄）の職員が手動で踏切を開け閉めしていたので、ランナーが走ってくると、遮断機が下り始めていても電車が来ていなければランナーをくぐらせて通していたんですよ。

出典：「戸塚はこんな街でした」田谷そよ

昭和45年（1970年）

南理容館　吉田町 3003-1 el sur101

創業 昭和2年（1927年）

昭和2年（1927年）に祖父が近所で床屋の営業を始めました。
昭和8年（1933年）にこの場所（旧大踏切脇）に移ってきました。
小さいころから踏切の音と戸塚の街のにぎやかな雰囲気の中で育ちました。
昔は店の前がバスターミナルだったので、通りがかりに来る方が多かったです。

平成21年（2009年）に区画整理があり、5年半ほどここから少し離れたところの仮店舗で営業していたときは、踏切の音が聞こえなくなって、寂しく感じたりもしましたが、仮店舗の場所がバス通りに面していて目立つ場所にあったので、新しいお客様や、懐かしんで来店されるお客様がたくさん来てくださるようになりました。
平成27年（2015年）に現在の場所に戻り、その頃のお客様が今でも来てくださいます。

一昨年創業90周年を迎えました。
現在の新しい現代風の店舗になって、「入りやすい雰囲気になった」とお客様も増えましたが、「『昔の床屋さん』という雰囲気の頃の方がよかった！」と言う昔からのお客様もいらっしゃいます。

時代の移り変わりとともに、理容の技術も求められるものも変わってきましたが、昔からの心意気は忘れずに、次に引き継ぐ息子にも伝えながら、創業100年に向けて、これからも続けていきたいと思っています。

3代目 中込 智恵さん
（左：中込 隼さん 右：中込 浩さん）

旧南理容館（昭和初期）

解体前（平成27年（2015年））

有限会社 山形屋洋品店　矢部町 76

創業 明治11年（1878年）

4代目 伴 博之さん 3代目 伴 忠男さん

足袋の職人であった祖父が仕立て屋として創業したのが明治11年（1878年）。
職人の作業着であった、屋号などを染めつけた袢纏（はんてん）の仕立てをしていました。
ここ戸塚の宿場町で、米こうじを使った甘酒、みそを作って売っていた本家と
並んで仕立屋を営んでいました。仕立てを独学で学んだ祖母や母は大変苦労したようです。
ミシンの前を離れなかった母の姿を思い出します。

その後、袢纏だけでなく手袋や足袋も扱うようになりました。
日立の工場が作った製品を納品するときに、
製品に指紋がつかないように使用する手袋の注文がとても多かったことも思い出します。

子どもの頃は、近くの戸塚競馬場へよく遊びに行きました。
いつも見ていたので、騎手の勝負服の色で勝ち負けがわかるようになりましたが、
そこにいる馬は全部軍馬で、馬場にある1本の松の木を敵に見立てて訓練していたことを
覚えています。

今はお祭り用の袢纏を専門に扱っています。
お祭り用品の専門店は少ないので、市外からもお客様が来ます。
袢纏の仕立てなどは、とにかく経験と技術が必要です。
昔からの技術を引き継ぎながら、新しいことも取り入れていかなければならないと思っています。
そのために常に視野を広く、アンテナを張ることが大切だと思っています。

山口木材株式会社　戸塚町 4532-3

創業 明治17年（1884年）

4代目 代表取締役 山口 秀利さん
昔の店舗の柱を移築してあります（横の柱）

創業者である曽祖父が矢沢で木材商を始めました。矢沢一帯の山から木を切り出して、木材として売っていました。大正11年（1922年）に駅のそばの吉田町に移転してきました。駅に近かったので、輸送に便利ということで、近くには木材屋が多かったです。店の前が箱根駅伝の中継所になっていて、東洋大学の選手のお世話をしたこともあったそうです。
関東大震災のあとは、周辺の多くの家々が倒壊してしまい、地域の家の建て直しなどにも多く関わりました。昔は、周辺のお店や住んでいる方々とのつながりが深く、老舗の「松本屋」さんの新築工事も請け負いました。駅前再開発によって、吉田町から今の場所に移り、昔ほどではありませんが、今でも深いつながりが残っているところもあり、このつながりは大切にしていきたいと思っています。

[秀利さんの母　道子さんのお話]
矢沢の山で営んでいる頃は、裏山の作業所で餅つきの臼を作っていたことや、賃挽き屋という男の人たちが山に上がってきて、大きな木材を運んでいたことを覚えています。昔は人力に頼ることが多くて、皆さんとても大変そうでした。女学校の頃は、戸塚駅を毎日利用していたので、駅員さんと顔なじみになったりと、のどかな昔を懐かしく思い出します。戸塚で遊ぶところがなかったので、競馬場に行っていたこともありました。吉田町に移ってからのお店では、焼き物（陶器）も売っていました。お店がバスセンターの前にあったので、駅を利用するお客さんがよく訪れてくれました。そのうち、お馴染みのお客様も増えて、お茶を飲みに来たり、地域の社交場のようになりました。

昭和30年代（1955～1964年）

吉田屋　戸塚町 3960

創業 大正3年（1914年）

左から吉田 俊子さん　小山 和子さん
菅沼 正子さん　吉田 洋子さん

創業以来、途中関東大震災などの被害を受けたりもしましたが、ずっとこの場所でやっています。再開発前は目の前にバスセンターがあったので、通りすがりの人がよく立ち寄っていきました。

昔は四季の行事や冠婚葬祭などの贈答品に多く和菓子が用いられていました。
お祝い事には紅白まんじゅうとか、赤ちゃんに背負わせる「一升餅」など、個々の家での行事も多く、小学校から大量に紅白まんじゅうなどの注文を受けると、お店の中はてんてこ舞いでした。
今ではコンビニエンスストアでも気軽に買えるようになったので、昔ながらの慣習が薄れてきてしまいましたね。茶道のお菓子としての需要も減ってしまいました。

それでも最近は、和菓子は小豆と砂糖だけで出来ているので、体に優しいことが浸透してきて、ツイッターなどのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を通して一つ一つ手作りした季節の和菓子を求める若年層のお客さんも増えてきました。今の人は昔のように慣例に従って食べるのではなく、食べたい時に食べるようになったのですね。時代の流れで、生活環境が変わっていくのは仕方がないのですが、日本独自の和菓子の文化をこれからも大切にしていきたいと思います。そのためにはSNSなども大いに利用していきたいです。

おいしいもの
とつかブランド

吉田屋の「お菓子なとつかとうふ」は
「おいしいもの とつかブランド」に認定されています

昭和初期

理容室ミズノ　戸塚町 3981-12 Mフラット

創業 明治45年（1912年）

4代目 水野 ひろみさん

明治時代に夫の祖父が創業しました。3代目だった夫が30代の若さで亡くなってしまい、以後自分が4代目として引き継いでいます。
再開発前はバスセンターの横にお店がありました。鏡の中にバスセンターの車や人々の行き来が映りこんで、お客様は座っている間中、退屈することはなかったようです。

昔は地域のつながりが深く、一緒に住んでいた96歳の母が街を歩くと、地域の皆さんが気にかけてくれて、何かあるとすぐに知らせにきてくれたりと、高齢者などを地域で見守っていました。
最近はそのような関係が薄くなってしまったことが寂しいですが、今はここが理容室としての機能だけでなく、来てくださったお客様（特に高齢者の皆さん）が気軽にお話ができる場、「地域の憩いの場」としての役割も担えているかな、と思っています。

出典：「戸塚はこんな街でした」田谷そよ

この絵の作者、田谷そよさんに絵を習っていました。駅前にあったお店の前を日々通りかかっていた田谷先生に声をかけられたことがきっかけです。

昔からの家具を今も大切に使っています